

国指定史跡

吉田古墳 (第3次調査) 現地説明会資料



2006

水戸市教育委員会

1. 吉田古墳とは

《古墳の立地》 吉田古墳は、水戸市元吉田町の台地の上にあります。現在は市街地化が進んでしまいましたが、昔は古墳のある台地のすぐそばまで千波湖が広がっていて、たいへん見晴らしのよい場所でした（第1図）。

《墳丘と石室》 現在残っている墳丘^{うんきゅう}の規模は、1辺が約8m、高さが1.7mを測ります。墳丘の南側に、半地下式の横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}があります。石室の大きさは、奥行が3.3m、間口が1.4mで、高さは1.6mです（第2図）。

《古墳の年代》 築造された時期は、石室の形からみて、古墳時代のおわり^{こふんじだいしゅうまつき}、7世紀前半頃と考えられています。

《壁画》 吉田古墳で注目されるのは、石室に壁画が描かれていることです。壁画は線彫りで、その内容は鞆^{たづ}（弓矢を入れる筒）を中心として、刀子・銚^{はこ}・鉄刀など、武器・武具類が描かれています（表紙の図および第3図）。

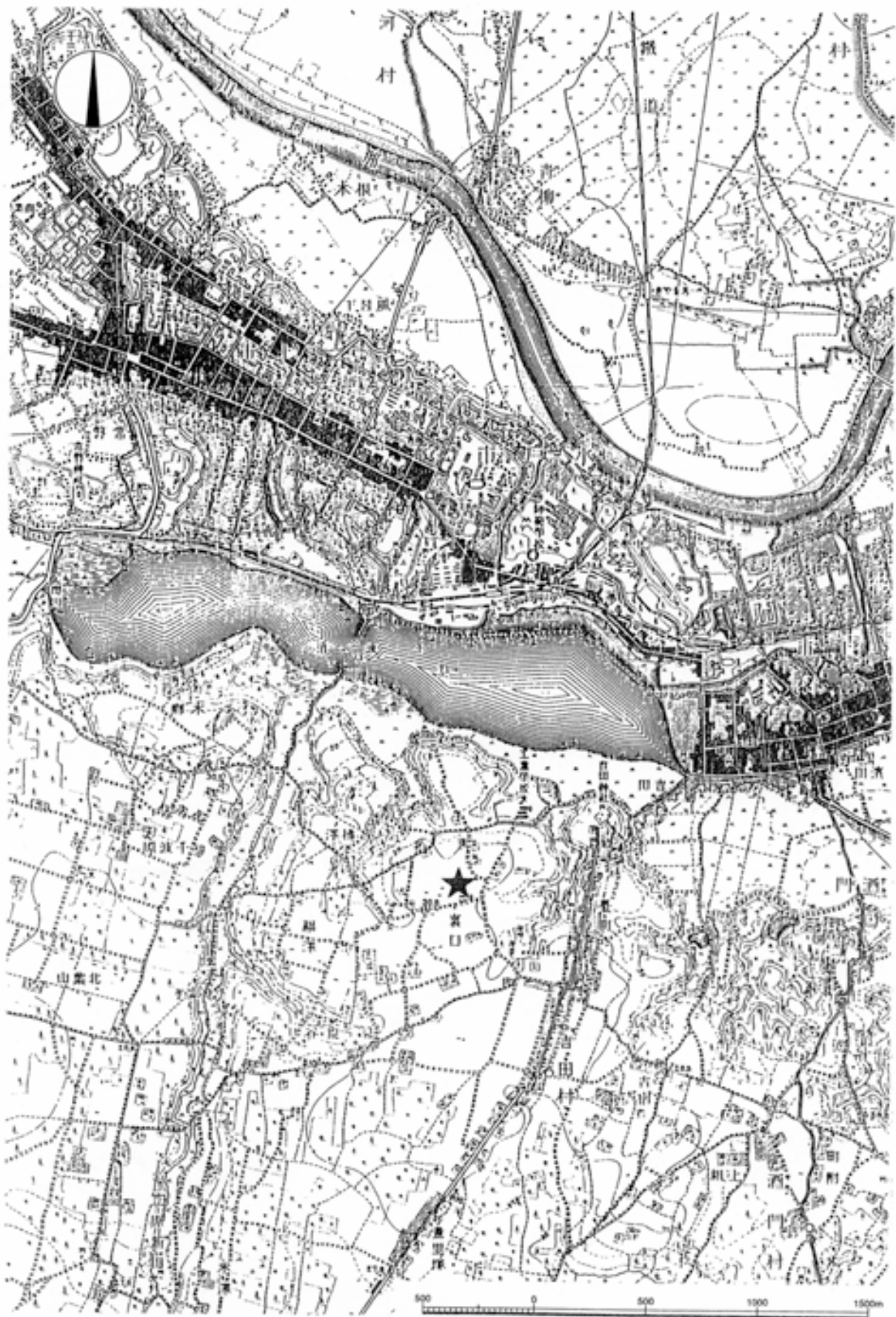
茨城県において、横穴式石室^{よこあなせきしつ}の奥壁にまとまった図像群が彫刻されているのは吉田古墳が唯一で、日本の装飾古墳^{そうしやくこふん}のなかでも重要な位置を占めるものです。

《副葬品》 副葬品^{ふくそうひん}は、石室が発見された大正時代に、すでに見つかっています。銀環^{ぎんかん}・鉄鍬^{てつくわ}・刀剣残片^{とうけんざんぺん}がありましたが、戦災によって焼失したものもあり、その一部が現在、水戸市立博物館に保管されています（第4図）。

《吉田古墳群》 また、吉田古墳は一つではなく、たくさんの古墳が集中して築かれた「古墳群」でした。大正時代の文献などでは、まだたくさんの古墳があったと書いてありますが、市街地化とともに削平され、場所もわからなくなってしまいました。現在は吉田古墳の北側に1基が残るのみとなっています（第2号墳）。

2. 吉田古墳の調査（第5図）

《これまでの調査》 これまで吉田古墳では、以下の2回の発掘調査が実施されています。
○第1次調査（第1～6トレンチ）：昭和47年に水戸市が環境整備計画のもとに、測量調査および墳丘・周溝^{しゅうこう}・石室の発掘調査を行ったものです。調査ののち保存のため石室は埋め戻され、現在、石室を直接見ることはできません。



第1図 大正期の古墳周辺の地形

★が吉田古墳、大日本帝國陸地測量部 1 / 25,000 地形図「水戸」に加筆



第2図 吉田古墳の石室 (1/100)



第3図 吉田古墳の壁画



第4図 吉田古墳出土の銀環

○第2次調査 (第6～9トレンチ) : 平成17年に水戸市教育委員会が、吉田古墳の史跡整備計画のもとに実施しました。この調査では古墳東側の周溝がはじめて確認され、古墳の規模が内径26m・外径35mという、那珂川流域では大型古墳に次ぐ規模であることが判明しました。また、従来定説だった「吉田古墳=方墳」の可能性が低くなり、円墳もしくは多角形墳などの可能性を検証する必要性が出てきました。

第1次・第2次調査のくわしい内容は、平成18年3月に『吉田古墳Ⅰ』(水戸市埋蔵文化財調査報告 第6集)として刊行しています。市立図書館や各公民館などでご覧になることができます。

《今回の調査》 今回の調査（第3次調査）は、昨年の第2次調査にひきつづき、水戸市教育委員会が吉田古墳の史跡整備計画のもとに行っているものです（平成18年12月4日～現在継続中）。

今回は、これまでの成果をひまえて、古墳の周辺に3つの調査区（第10～12トレンチ）を設定し、発掘調査を実施しました。

3. 第3次調査の成果（第10トレンチ～第12トレンチ、第5図）

《特徴的な周溝の発見》 発掘調査の結果、古墳をめぐる堀（周溝）が検出されました。注目されるのは、周溝が直線的にのび、なおかつ角をもっていることです。古墳は、墳丘が円墳だとしたら、周溝も円形なのが一般的ですから、吉田古墳の場合は円墳の可能性がほぼなくなったといえます。また、墳丘が四角形の場合は、周溝も四角形になることが多いのですが、吉田古墳の周溝は直線的ではあるけれども、角の部分が90°より大きく開いていることから、方墳の可能性もほとんどないと考えられます。

残った選択肢のなかで可能性として最も高いのが、墳丘が多角形になる「多角形墳」です。多角形墳は、これまで六角形墳と八角形墳が発見されています（第6図）。吉田古墳の場合は、周溝の角度が150°前後になり、正六角形の角度（120°）より、正八角形の角度（135°）に近いことがわかります。ただし、15°ほどの歪みがあることも事実です。これをどう考えればいいのでしょうか。

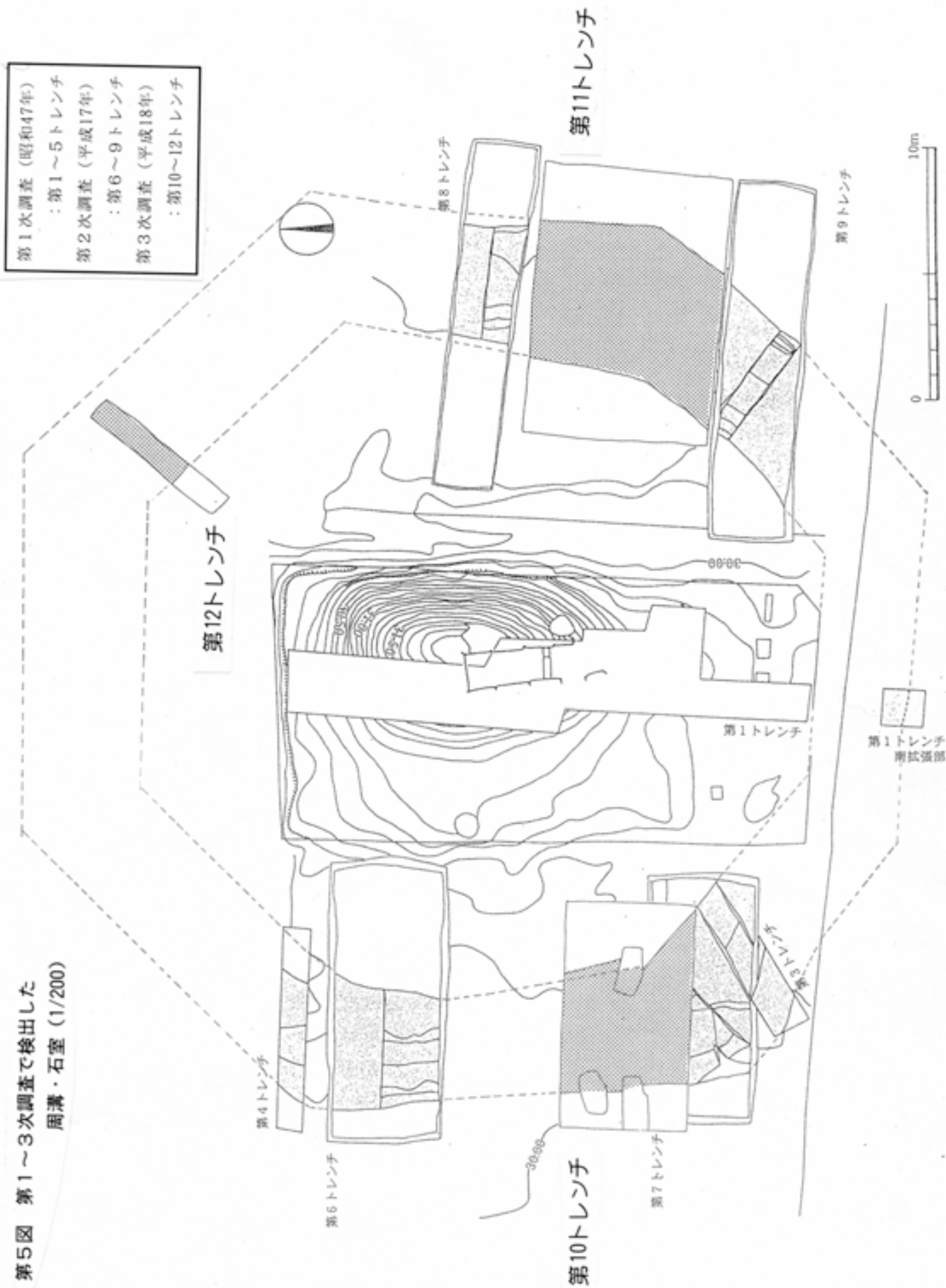
実は地方で見つかっている八角形墳は、正八角形になるほうが少なく、若干の誤差が出る古墳のほうが一般的です。これを古墳の築造のさいに発生した「施工誤差」とみる考え方があります。今回の調査で認められる“15°の歪み”は、このような施工誤差によるものと考えられます。

このように、吉田古墳は正八角形ではないものの、正八角形墳を意識してつくられている様子がうかがえることから、八角形墳の可能性が高いものと判断しました。

《八角形墳とは（第6図）》 八角形墳は、近畿地方では7世紀中葉以降、舒明・孝徳・斉明・天智・天武・持統・文武といった天皇陵の、有力な候補となっている古墳を中心として確認されているものです。

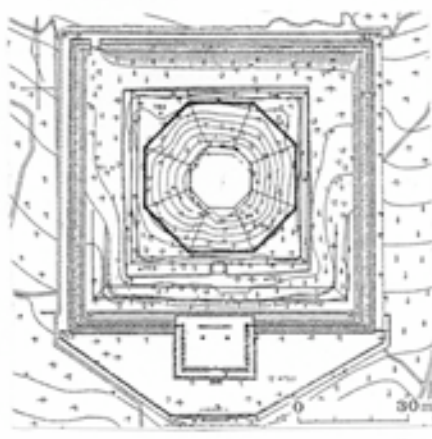
八角形という形については、“八”をすぐれたものとする大陸の道教思想が強く反映しており、当時の権力者の支配が四方八方の全世界に及ぶことを墳形にあらわしたものの、という考え方が有力です。このことから、当時絶大な権力を誇っていた大王（天皇）の墓として採用されたと考えられています。

第5図 第1～3次調査で検出した
周溝・石室 (1/200)

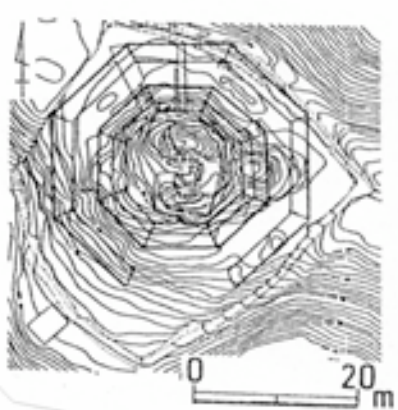




1



2



3



4



5



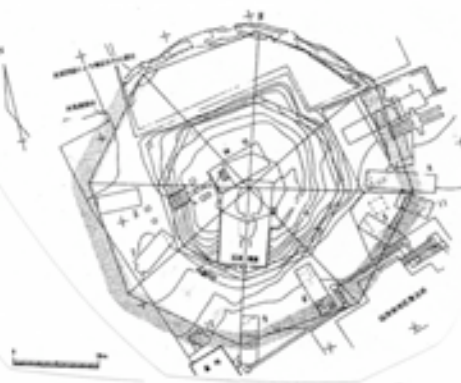
6



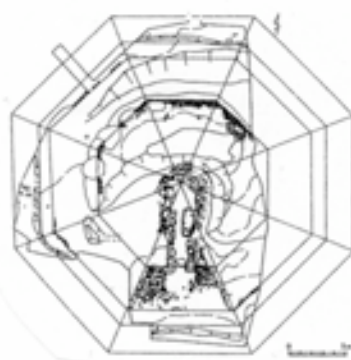
7



8



9



10



11

- 1 : 天武・持統合葬陵(明日香村)
- 2 : 天智天皇陵(京都市)
- 3 : 中尾山古墳(明日香村)
- 4 : 中山荘園古墳(宝塚市)
- 5 : 梶山古墳(鳥取市)
- 6 : 梶山古墳石室彩色壁画
- 7 : 尾市1号墳(新市町)
- 8 : 経塚古墳(一宮町)
- 9 : 稲荷塚古墳(多摩市)
- 10 : 三津屋古墳(吉岡町)
- 11 : 武井廃寺塔跡(新里村)

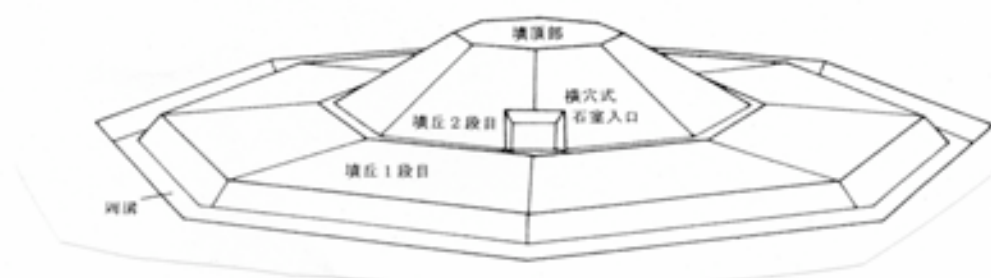
第6図 各地の八角形墳

また、畿内の大王墓だけではなく、地方にも八角形墳が築かれます。地方の八角形墳の築造年代は、畿内の八角形墳の年代より古いものがあることから、単純に大王墓をまねたものと考えすることはできません。渡来系氏族の影響や地方独自の古墳文化の影響など、地方の八角形墳の成立にはさまざまな要因があると考えられていますが、まだ結論はでておらず、謎の多い墳形ということが出来ます。

《古墳の形状について》 吉田古墳が八角形墳だとしたら、本当の吉田古墳はどのような形状だったのでしょうか。現在の墳丘は、戦前に行われた土取りや、ながい年月の風化・崩落によって、本来の形・大きさは失われていますので、これも発掘調査で得られた成果が、復元のための重要なポイントとなってきます。

古墳の墳丘は、周溝の内側からすぐに築かれることが多いのですが、これまでの3回にわたる調査では、周溝の内側から墳丘がつくられた形跡は認められていません。また、周溝の内側の傾斜もやや急であることから、周溝の内側から墳丘がつくられる可能性は低いと考えています。さらに、昭和47年に行われた第1次調査では、前庭部という、石室の前に設けられた祭礼を行う広場が見つかっています。その位置関係等から推定して、墳丘は周溝の内側からすぐに築かれたのではなく、テラス状の空間が設けられた上で、八角形の盛土が築かれたと考えられます。

このような形状の古墳の例としては、東京都多摩市の稲荷塚古墳があります。これも八角形墳の可能性が高い古墳です（第7図）。



第7図 稲荷塚古墳の墳形（復元図）

《発見の意義》 八角形墳は、東日本では山梨県・群馬県・東京都でわずかに認められる程度です。また、数十万基におよぶ全国の古墳のなかで、可能性があるものを含めて20基弱のみしか確認されておらず、全国的にもたいへん珍しい古墳といえます。

さらに、八角形である上に装飾をもつ古墳ということになると、全国でも鳥取市梶山古墳（彩色の壁画をもつ変形の八角形墳）しか認められていないことから、その稀少的価値はもちろん、古代史のなかでも重要な意義をもつこととなります。

八角形墳の被葬者は、畿内政権や大陸とのつながりが深く、地域支配において大きな影響力を持つことのできた人物と考えられています。吉田古墳の被葬者も、そのような人物の一人であった可能性がうかがえます。吉田古墳の被葬者が、円墳や方墳など、旧来の形をとらず、中国の道教思想を取り入れた斬新な八角形墳を採用した背景には、古代常陸国の複雑な政治的影響があることは間違いありません。

吉田古墳が今後の補足調査及び検証により八角形墳と確定すれば、八角形墳としては県内初の発見、線刻をもつ装飾古墳の八角形墳としては全国初の貴重な発見となります。常陸国の古墳時代史・古代史を考える上で欠かせない存在になるだけでなく、わが国の古墳時代の終末を考える上でも、意義のある成果といえるでしょう。

《その他》 今回の調査では、古墳の周溝だけではなく、近現代の珍しい遺構も見つかっています。それが第10トレンチで検出された、2基の胞衣埋納遺構です。

胞衣とは、出産のさいの後産のことです。むかしは胞衣をカフラケや壺などの容器に入れ、建物の下に埋める風習がありました。その起源は古く、奈良時代の遺跡から見つかっています。

今回出土した2基の遺構は、フタつきの小さな壺で、出土状況から胞衣を埋納したものと思われます。県内の出土例はたいへん少なく、貴重な発見といえます。

胞衣を埋納する風習は現在ほとんど失われており、遺跡から見つかる胞衣埋納遺構は、古代から現代まで続く人生儀礼の歴史をひもとく、重要な資料なのです。

5. おわりに

今回の調査において“八角形墳の可能性が最も高い”という見解が得られ、古代常陸国における吉田古墳の意義はさらに高まってまいりました。しかしながら、八角形墳であることを確定するには至りませんでした。全国的にみても、八角形墳といわれている古墳の大半は可能性でとどまっており、天皇陵以外で八角形墳と断定できた古墳は数例しかありません。八角形墳の調査が、いかに難しいかをうかがわせます。

吉田古墳の調査は、史跡整備計画のなかで行っています。今後も事業は継続いたしますので、来年度以降も、八角形墳の確定における補足調査を慎重に実施していく予定です。

なお、今回の調査の報告は『吉田古墳Ⅱ』として刊行し、市民の皆様に活用していただく予定です。

吉田古墳（第3次調査）現地説明会資料

2006年12月17日

編集・発行 水戸市教育委員会

〒310-8610 茨城県水戸市中央1-4-1

TEL 029-224-1111（内線542）

FAX 029-228-3553